様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　３ 年　６ 月 ２３ 日現在

機関番号：３２６１３
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2018～2020
課題番号：１８Ｋ０２４９５

研究課題名（和文）災害後の遊びは子どもに何をもたらすのか―「災害遊び」から生まれる文化―

研究課題名（英文）Benefits of post-disaster play in children: Culture formed by "disaster play"

研究代表者
安部　芳絵（ABE, Yoshie）

工学院大学・教育推進機構（公私立大学の部局等）・准教授

研究者番号：９０３８６５７４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,300,000円

研究成果の概要（和文）：　本研究では、災害後の遊びの実態を被災地域の児童館・放課後児童クラブを対象とした質問紙調査およびインタビュー調査から検討した。その結果、災害は子どもの遊び環境が減少するだけでなく、一人で遊べない、遊びが長続きしないなど遊びの内容にも影響を及ぼしていることが明らかとなった。また、6割の支援者が、研修やメディアを通して地震ごっこなどの災害遊びを知っていたが、実際に目の当たりにすると「どうしていいかわからなかった」「やめさせた」という実態も浮き彫りになった。災害遊びをめぐっては、子どもに回復をもたらすと同時に支援者にゆらぎ（葛藤）を引き起こしていることが判明した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
　本研究の学術的意義は第一に災害後の子どもの遊びの実態を明らかにしたことである。質問紙調査の結果、子どもの遊びが環境と内容の両面で災害の影響を受けること、加えて、災害遊びについて一般に知られている「地震ごっこ」「津波ごっこ」以外の具体例を収集したことが挙げられる。
　社会的意義としては、現場で支援者が直面する葛藤をインタビューを通して明らかにしたことである。災害遊びは医学・心理学的には見守るのがよいとされる。しかし、本調査では、見守るのがよいと知りながらも自身の被災経験などから見守れない支援者の葛藤が明らかとなった。このことは、今後の災害後の子ども支援を考える上で大きな課題といえる。

研究成果の概要（英文）：This study examines the social reality of post-disaster play through interview and questionnaire surveys conducted in children’s centers and after-school children’s clubs in the disaster-affected areas. The results disclosed that disasters not only reduced the play area for children, but also affected its contents, as children were unable to play alone or for longer periods of time. It was also revealed that 60% of the supporters were aware of disaster plays such as “playing earthquake” through training and mass media, but on witnessing it, they “didn’t know what to do” or “stopped the play”. Moreover, the study found that disaster play helped the children recover, but received conflicting responses from the supporters.

研究分野：こども環境学、教育学

キーワード：災害遊び　ゆらぎ　児童館　放課後児童クラブ　東日本大震災　熊本地震　子ども支援　専門性

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

相次いで日本列島を襲う災害により、多くの子どもたちが被災する一方で、災害直後から遊び始める子どもたちにおとなが戸惑う様子が報告されている。復旧・復興プロセスでは遊び環境は後回しにされがちであり、遊び場がなくなり、子どもから遊びそのものが奪われてゆく。このような状況に対し、災害遊びを含む災害後の遊びの実態把握は十分とは言い難い状況にある。先行研究からは、災害後の遊びが子どもの成長回復につながる可能性があることがわかっているにも関わらず、なぜ遊びは奪われるのか。このような背景を問いの出発点とした。

２．研究の目的

本研究の目的は、災害など非日常における遊びが子どもになにをもたらすのかを実証的に明らかにすることである。具体的な問いは、次の①～⑤である。①災害後の子ども（0-18 才）の遊びの実態は？／②災害後の遊びで子どもはどのように回復したのか／③災害後の遊びを支援者はどうとらえ支えたのか／どのような戸惑いや葛藤に直面したのか／④災害後の遊びを通した成長（PTG）は？／⑤災害後の遊びからどのような文化が生まれた・生まれつつあるのか。③については、とくに「災害遊び」に着目した。

３．研究の方法

本研究は、(a)文献調査、(b)遊びの実態調査、(c)支援者調査、(d)結果の公表の４つから構成され、3 年間で上述の研究目的①～⑤を明らかにすることをめざした。

(b)遊びの実態調査第Ⅰ期（2018 年）は、東北３県の児童館、熊本地震・北部九州豪雨被災地域の児童館および放課後児童クラブ（宮城県石巻市・熊本県益城町・同御船町・福岡県朝倉市・大分県日田市）全 472 か所を対象とした質問紙調査を実施した。第Ⅱ期（2019 年）では、第Ⅰ期調査を深めるためにインタビュー調査を実施した。(c)支援者調査では、第Ⅰ期・第Ⅱ期ともに兵庫県立舞子高等学校環境防災科の高校生と石巻市子どもセンター職員を対象としたインタビュー調査を実施した。最終年度の追加調査（2020 年）は、オンラインで行った。(d) 結果の公表は、こども環境学会等で発表したほか、論文（査読付き含む）や一般向けの書籍、HP 等で発信した。

４．研究成果

本研究の成果は以下のとおりである。

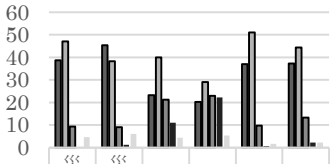
４（１）子どもの遊びの実態と回復の過程（①②）（安部、2020a）

災害後の子どもの遊びの実態調査（2018 年 12 月実施、回収率 63.6%、合計 300）によると、災害前・災害直後・現在の子どもの遊ぶ環境の変化について「災害前」は屋内外ともに遊び場が「じゅぶんあった」「あった」が 8 割を超えている。ところが「災害直後」には遊び場が「あまりなかった」「まったくなかった」と答える割合が増加し、特に、屋外の遊び場は「あまりなかった」23.0%、「まったくなかった」22.3%と顕著である。なお屋外の遊び場は 2018 年現在も災害前のように回復したとは言い難い状況にあることがわかる（**表１**）（安部、2020a）。

内容面では、災害前から現在にかけて子どもの遊びに変化があったと答えたのは 31.0%であり、「災害前は一人遊びが平気だった子も、直後は、いつも誰かといたがったり、特に大人（職員）のそばにいたがる子が見られた。」（宮城県児童館）、「外遊びが規制されていたので、筋力の低下が感じられる（すぐに転ぶ、転んでも手が出ないなど…）。ルールのある外遊び（鬼ごっこなど）も知らない。」（福島県児童館）、「１つの遊びが長続きしない」（熊本県児童館）、「外遊びができなかったので、室内だけだとストレスを感じる子もいました。」（大分県放課後児童クラブ）

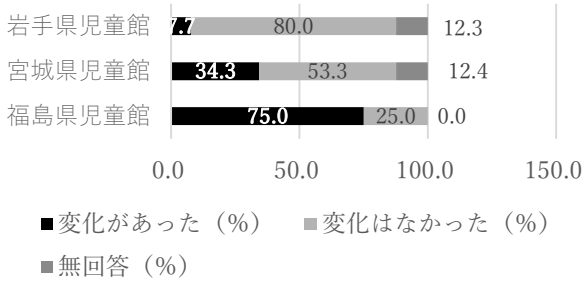
のような具体的記述が見られた。これに対し、「変化はなかった」と回答した 57%に注目すると、災害後の子どもの遊びに何の変化もなかったのではなく、直後には何らかの変化がみられたが、現在は災害前と変わらない状況であることがわかった。

表１　災害前・直後・現在の遊び場の変化



	災害前・屋内	災害前・屋外	直後・屋内	直後・屋外	現在・屋内	現在・屋外
じゅうぶんあった	38.7	45.3	23.3	20.3	37	37.3
あった	47	38.3	40	29	51	44.3
あまりなかった	9.3	9	21.3	23	9.7	13.3
まったくなかった	0.3	1.3	11	22.3	0.7	2.3
無回答	4.7	6	4.3	5.3	1.7	2.3

表２　東北3県　児童館の比較



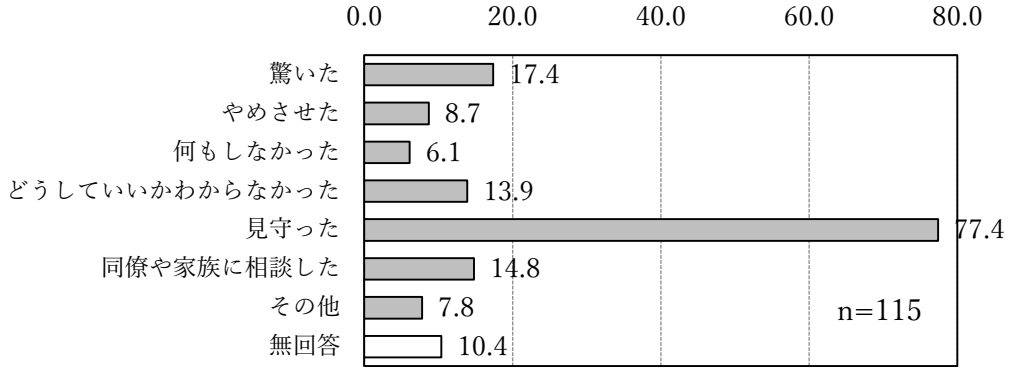
なお、このような遊びの内容の変化には地域差がみられた。災害前後の子どもの遊びの変化に関して「変化があった」と答えたのは岩手県では 7.7%であったのに対し、福島県では 75%であった。このように、同じ東日本大震災の被災地域であっても、子どもの遊びの変化の内実は異なっていた。「原発事故の影響で、外遊びが全くできない時期と、その後、時間制限があった時期があり、自然のものに触れる遊び（落ち葉拾いや雪遊び）をさせない時期があった。その後も、各々の放射線に対する意識の違いから、外遊びに関しては、一瞬ためらうクセがついた。」（福島県児童館）のように、福島県では原子力災害による外遊びへの影響が如実に表れていることがわかる（**表２**）（安部、2020a）。その他の設問では地域差はみられなかった。

４（２）災害後の遊び（災害遊び）と支援者のゆらぎ（③）（安部、2020a）

本調査より前に災害遊びを知っていたのは 59.3%であった。そのうち情報の入手先は「研修」57.9%、「テレビ」54.5%が多かった。災害遊びについて当てはまるものを質問したところ、「あまり知らない」49.7%、「どう対応すれば子どもの回復によいのか知りたい」41.0%、「支援者がどう対応したか、具体例を知りたい」35.3%が多く、「よく知っている」と答えたのはわずか 20.7%であった。「災害遊び」という名称は知っているものの、具体的な対応については不明確であることが伺える。実際に、児童館や放課後児童クラブで「災害遊び」を見たことがあるのは 32.0%であった。時期は、「2011～2013 年」が最も多く 65.6%であるが、2011 年より前も 2 件あった。年齢は、「5～8 歳未満」が最も多く 42.7%であり、平均は 7.5 才である。

災害遊びをみたときの支援者の反応はどうであろうか。回答では「見守った」が最も多く 77.4%であった。次に多かったのが「驚いた」17.4%であり、「同僚や家族に相談した」14.8%、「どうしていいかわからなかった」13.9%と続く。「やめさせた」のは 8.7%であった（**表３**）（安部、2020a）。クロス集計の結果、災害遊びを見て「どうしていいかわからなかった」支援者（16 件）は、当てはまるものを聴いた項目で「９「災害遊び」にどう対応すれば子どもの回復によいのか知りたい」を選んだのが 13 件、「６「災害遊び」を見た支援者がどう対応したか、具体例を知りたい」を選んだのが 11 件であり、より具体的な支援の情報を欲していることがわかる。

表３　災害遊びをみたときの反応（安部、2020a）



児童館や放課後児童クラブでみた災害遊びの内容はどのようなものであろうか。自由記述全96件を分類すると、「地震ごっこ」47.9%（46件)、「津波ごっこ」40.6%（39件)、「サイレン(緊急地震速報)ごっこ」18.8%（18 件)、「葬式ごっこ」3.1%（3 件)、「救助ごっこ」3.1%（3件)、「詳細不明」6.3%（6件)、「その他」10.4%（10件）であった。その他には、避難所ごっこ、ガイガーカウンターでスクリーニングごっこ、がれきごっこなどが挙げられた。一部は重複している。詳細は以下の通り（**表４**）(安部、2020a)。

表４　災害遊びの時期・場所・具体例（安部、2020a）

番号	分類	時期場所	具体例
1	災害を表す言葉を使	2011 宮児	「津波だ～」と言って水を流していた。
2		2014 宮児	「地震だ～」と言って、隠れたりするごっこ遊び。
3		2016 熊ク	音楽室を間借りしているので、メトロノームを震度計に見立て、早く作動させ、「震度１０です！」「地震です！」と言って、机の下に隠れたり、メトロノームを早く作動させ、震度の大きさを表現していた。
4	道具を使う	2011 宮児	ブロックを組み立てて壊す。カプラを積み上げて壊す。砂場で山やトンネルを作って壊すなど。
5		2011 福児	ブロックでガイガーカウンターを作ってスクリーニングごっこ。
6	壊す・崩す	2011 岩児	砂場で山を作り、「津波だ～」と言って山を崩す遊び。
7		2011 宮児	ブロックや積み木を人に見立て、並べたものを「津波だ～！」と言って倒して遊んでいた。
8		2011 宮児	ブロックでおうちを作って、「津波がきたぞ～」と言って壊す遊び。
9		2013 宮ク	シルバニアを使ってお家ごっこ遊びをしていた時、大型のお家を使ってお家ごっこをしていた時、「大きい地震がきたぁ～キャーアキャーア」と言いながら家を揺らし壊していた。
10	全身で表現する	2011 宮ク	「サイレンごっこ」緊急地震速報の音（サイレン）を言って逃げる遊び。
11		2011 宮ク	布を使って「津波がくる」など、言葉を発しながら走る。ブロックを「津波がきた」など、会話しながら遊ぶ。
12		2011 宮児	津波ごっこ（鬼ごっこのようなもの）。鬼が津波。
13	ゆらす	2016 熊ク	ブロックや空き箱等で家を作り、足で踏んだり、壊したり、揺らしたりする。
14		2017 熊児	板の上に複数の子どもが乗って、飛び跳ねながら板を揺らして、「地震だ、地震だ～！」と言って遊んでいた。
15	つ	2011 岩児	葬式ごっこ。砂場で小石を持ってきて、お墓を作って拝む。

16		2012 岩児	砂場で砂を掘り、お墓を作る。
17	つくりなおす	2010 宮児	ままごとの中で「津波がきて、おうちがなくなってしまった」という設定で、おうちを作り直す遊び。
18	くりかえす	2011 宮児	複数人でママごとの道具で家を作り、ママごとをしているが、時々「津波だ～」「地震だ～」と全てを壊して喜ぶ。また作り直して同じことを繰り返す。
19		2011 宮児	アリや小さな虫等を見つけると、コップ等で「津波がきたぞ！逃げろ～！」と言いながら水をかける。繰り返し繰り返し、アリや虫を追いかけては水をかける。
20		2016 熊児	砂場で型抜きしたプリン等を５個くらい作り、黙々とつぶす遊びを繰り返す。遊び終ると笑顔ですっきりした表情になっていた。

これらの災害遊びを目撃した支援者のなかには、研修で災害遊びの重要性を学んだものの、対応に葛藤を抱えているケースもあった。仙台市青葉区のある児童館では、研修で災害遊びを見守ることの重要性を学んだものの、遊んでいる本人ではなく「周りの子の対応に悩む。その遊びを見せないようにするのがよいのか…」と回答している。同様の葛藤は、インタビュー調査でも語られている。対人支援職が現場で直面する葛藤や不安感・わからなさの総称を「ゆらぎ」という（尾崎、1999：18－19）。「ゆらぎ」はそのまま放置しておくと支援の破綻を招く恐れがある（安部、2016：97－98）。医学・心理学的には見守るのがよいとされる災害遊びであるが、支援者自らが被災した場合、見守ることができない状況も出現している。このことをゆらぎという観点からどのように捉えることができるのか、さらなる研究が必要である。

４（３）災害後の遊びを通した子どもの変容（④）（安部、2020b）（安部、2020c）

支援者調査の対象でもある兵庫県立舞子高等学校環境防災科の高校生は、西日本豪雨後の支援活動との関連で、避難所で子どもと遊ぶことは子どもだからこそできる支援であると指摘した。このほかにも、西日本豪雨（2018）後には、被災した子ども自身が、遊びを通して同じく被災した子どもを支える姿が報告されている。遊びを通して子どもが自分を取り戻したり、そのようすを見ていたおとなが元気になるようすは、広島県のおとなに対するインタビューでも語られた。被災後の遊びを通して、被災の当事者である子どもを含めた「子ども」が、「支え手」となっていく道筋がみえる（安部、2000b：6）。同様の状況は、岡山県倉敷市真備町の子どもと保護者へのヒアリングからも析出された（安部芳絵、2020c：2）。

４（４）災害後に生まれる文化（⑤）

災害後の遊びからどのような文化が生まれた／生まれつつあるのかについては、現在論文にまとめている。

（引用文献）

安部芳絵　2016『災害と子ども支援』学文社

安部芳絵　2020a「災害後の遊びの実態と課題」『子ども環境学研究』第 16 巻第 2 号、pp.26-32

安部芳絵　2020b「災害後の子どもたちの声に学ぶ―『災害時に子どもたちが果たした役割の記録』をこれからに活かす―」公益社団法人セーブ・ザ・チルドレン・ジャパン　2020『災害時に子どもたちが果たした役割の記録～2018 年西日本豪雨の経験から～』pp.6-9

安部芳絵　2020c「倉敷市真備地区における児童館職員による遊び場づくりの検証 ―災害時における子どもの遊び支援の意義と可能性―」児童健全育成推進財団『倉敷市真備地区調査報告』pp.2-10

尾崎新　1999『「ゆらぐ」ことのできる力　ゆらぎと社会福祉実践』誠信書房

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計6件（うち査読付論文　2件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　4件）

１．著者名 安部芳絵	４．巻 23
２．論文標題 いじめか、遊びか―鹿川裕史君事件にみる葬式ごっこに焦点をあてて―	５．発行年 2021年
３．雑誌名 工学院大学教職課程学芸員課程年報	６．最初と最後の頁 53-63
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 安部芳絵	４．巻 46
２．論文標題 災害後の遊びの実態と課題	５．発行年 2020年
３．雑誌名 こども環境学研究	６．最初と最後の頁 26-32
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 安部芳絵	４．巻 22
２．論文標題 災害や流行性疾患による学校の臨時休業と教育課程編成	５．発行年 2020年
３．雑誌名 工学院大学教職課程学芸員課程年報	６．最初と最後の頁 65-72
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 安部芳絵	４．巻 53
２．論文標題 子どもの声を聴き、声に向き合う―災害後の支援者が直面した 「ゆらぎ」と省察―	５．発行年 2020年
３．雑誌名 キリスト教文化研究所研究年報	６．最初と最後の頁 103-119
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 安部芳絵	4．巻 21
2．論文標題 教育課程における遊びの位置―乳幼児期から青年期の発達と学習から―	5．発行年 2019年
3．雑誌名 工学院大学教職課程学芸員課程年報	6．最初と最後の頁 21-30
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 安部芳絵	4．巻 30
2．論文標題 児童館と子ども参加―石巻子どもセンター指定管理者選定における子ども委員の活動を例として―	5．発行年 2019年
3．雑誌名 子どもの権利研究	6．最初と最後の頁 274-275
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計6件（うち招待講演　2件／うち国際学会　0件）

1．発表者名 安部芳絵
2．発表標題 地震ごっこ・津波ごっこは子どもに何をもたらすのか―対抗遊戯とそこにいる他者―
3．学会等名 第2回　声のつながり研究会
4．発表年 2020年

1．発表者名 安部芳絵
2．発表標題 災害と子どもの遊びに関する基礎的研究―災害後の遊びの実態に関する調査分析を通して―
3．学会等名 こども環境学会2019年大会
4．発表年 2019年

１．発表者名 安部芳絵
２．発表標題 児童厚生員・放課後児童支援員に聴く―地震ごっこ・津波ごっこの実相と衝撃―
３．学会等名 第1回声のつながり研究会
４．発表年 2019年

１．発表者名 安部芳絵
２．発表標題 児童館と子ども参加―石巻市子どもセンター指定管理者選定における子ども委員の活動を例として―
３．学会等名 子どもの権利条約総合研究所研究報告（早稲田大学）2018
４．発表年 2018年

１．発表者名 安部芳絵
２．発表標題 子どもに聴く
３．学会等名 主催：宮城学院女子大学　ことばを聴く、ことばを育む―複言語・複文化主義と教養教育―シンポジウム「声を聴く、声をしるす」（招待講演）
４．発表年 2019年

１．発表者名 防災共育ワークショップ（足利市PTA・OB会）、安部芳絵
２．発表標題 参加する権利って何？ ―防災共育ワークショップから考える災害と子ども支援―
３．学会等名 子どもの権利条約フォーラム2018inとちぎ（招待講演）
４．発表年 2018年

〔図書〕　計3件

1．著者名 安部芳絵	4．発行年 2020年
2．出版社 高文研	5．総ページ数 191
3．書名 子どもの権利条約を学童保育に活かす	

1．著者名 安部芳絵他	4．発行年 2020年
2．出版社 公益社団法人セーブ・ザ・チルドレン・ジャパン	5．総ページ数 128（6-9）
3．書名 災害時に子どもたちが果たした役割の記録～2018年西日本豪雨の経験から～	

1．著者名 安部芳絵他	4．発行年 2018年
2．出版社 本の泉社	5．総ページ数 190
3．書名 子ども白書2018（分担執筆　震災を生きる子どもたち「災害と子ども支援―気候変動の時代と子どもの権利保障―」）	

〔産業財産権〕

〔その他〕

災害時に子どもたちが果たした役割の記録～2018年西日本豪雨の経験から～
https://www.savechildren.or.jp/news/publications/download/yakuwari2020.pdf
工学院大学教育推進機構教職課程科　安部芳絵
https://er-web.sc.kogakuin.ac.jp/Profiles/13/0001221/profile.html
児童健全育成推進財団『倉敷市真備地区調査報告』
https://www.jidoukan.or.jp/info/news/84695a8bb925

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究協力者	間瀬　幸江 (MASE Yukie)		文化論アドバイザー
研究協力者	三浦　玲 (MIURA Rei)		学校教育アドバイザー
研究協力者	田代　光恵 (TASHIRO Mitsue)		NGO・学童アドバイザー

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関